音画の肯定的解釈の試み——ベートーヴェン《田園的》の批評における基本戦略

柴田蒼良（東京大学）

本発表では、L. v. ベートーヴェン（1770-1827）作曲の交響曲第 6 番《田園的 Pastoral》ヘ長調作品 68（1808）に関してドイツ語で書かれた批評において、当時一般に批判的に捉えられていた音画をどのように評価しようと試みたのかを明らかにする。

《田園的》には、明らかな描写的要素——たとえば、第 2 楽章における鳥の鳴き声の模倣、第 4 楽章における雷と嵐の描写——が含まれている。このような音楽における描写的な部分は当時「音画 Tonmalerei」と呼ばれ、しばしば批判の対象とされていた（e.g. Sulzer 1771-74; Engel 1780）。ベートーヴェンはスケッチ段階からこの点を気にしており、パート譜初版（1809）には、作曲家自身によって「音画というよりはむしろ感情の表現」という言葉が付された。この付言は、この作品が音画ではなく感情の表現であると述べるのではなく、音画であることにはある程度譲歩しつつも、しかし感情の表現の方が優位にあると主張する、曖昧な言説である。このように、《田園的》において音画は重要な位置を占めている。

《田園的》と音画に関するこれまでの研究では、作品そのものにおいて音画ないし件の付言をどのように解釈することができるか、という点が主に取り上げられてきた（e.g. Sandberger 1924; Rietmüller 2008; Bonds 2020）。そこで本発表では、ベートーヴェンが生きた時代の批評において、この作品における音画がどのように理解されていたのかに着目する。ここからすぐに明らかになる点として、音画に関する当時の一般的な理解に反して、《田園的》における音画を肯定的に捉えようとする姿勢が散見されることを挙げることができる。ここに生じているある種の矛盾を批評家たちがどのように克服しようとしたのか（あるいはしなかったのか）、その方向性を明らかにすることは、《田園的》の受容を考えるにあたって核心的な問題である。

この点について、ウィルはベートーヴェンの付言において「音画」に対置された「感情の表現」、および当時の思想の潮流である「ロマン主義」という視点から《田園的》の批評を読解しているが（Will 1997; 2002）、本発表の独自性は音画をめぐる当時の言説空間のうちに一連の批評を位置づけるところにある。対象とする批評は、ベートーヴェン作品に関する 1830 年以前の主要な言説を収めた選集（Kunze 1987）を参照しつつ、RIPM 等のデータベースで調査した記事を加える。これらの精読をとおして、音画を一種の冗談とみなしたり、対象を正確に模倣したりするといった、これまでの音画論において批判的に考えられていた論点が、《田園的》の批評において肯定的に捉え返されていることを主張する。